

12年の審判生活を振り返って

審判部 川武修

この度、南風のフリートーク原稿を依頼され、一瞬これは困った事になったと思いましたが、毎回読ませて戴くばかりではと思いお引き受けしました。これまで投稿された皆さんのように上手くまとめることは出来ませんが、審判としての思い出や経験をなど思いつくまま書かせて戴きます。

昭和48年、下関商業を卒業と同時にプレイが続けたいとの思いから、県下の実業団チームであった笠戸船渠（下松市）に入社しました。当時、チームは県実業団の2部に所属し、1部昇格と県内上位を目指してチーム強化を計っていた頃でした。幸い翌年には1部に昇格し、以後数年間は実業団や一般の各大会で上位を占め、3回の国体を経験するなど、プレイヤーとしては恵まれた時期を送ることが出来ました。

さて、私が初めて審判員として高体連の大会にかかわったのは、社会人となって3年目の頃で、下松市で開催された県レベルの大会でした。当時は、前述したようにプレイヤーであり、又、若さも手伝って、審判なんかと軽視していた頃でした。しかし、地元での開催ということで仕方なく引受ける事になり、会場へと向かいました。今から思えばお恥ずかしい話ですが、プレイヤーでありながらルールの解釈はあやふやで、道具は借物、ましてや審判としての動きや約束ごとなど全く理解していない状態でした。結局そのゲームで吹いた笛は2回だけで、ゲーム終了後はいたたまれず、急いで会場を後にしました。ちなみに、記念すべきデビュー戦の相手審判は現審判委員長の小池正夫先生でした。ご本人はこの時の事などご記憶にないとは思いますが。

そんな惨めな事があってからも審判に目を向けることなく、プレイヤーとしての日々が続きました。そして27才になった頃、ある試合で審判の処置に対して疑問を持った私は、本格的に審判に取り組もうと決意しました。そこで、前周南地区審判委員長の平川登氏（徳山商業コーチ）に指導をお願いしたところ、快く引き受けて戴き、以後高等学校や中学校のゲームを中心に実戦で経験を積んで行く事になりました。

当時の周南地区は西田 彰氏（周南地区委員長）をはじめ、下松高校に弘中幸雄先生（県教委）、徳山北高に高松 正先生（光ヶ丘高）がチームの強化と共に審判としても活躍されていました。地区の公式戦や練習ゲームには必ずといっていいほどバッグをさげて足を運び、多くの経験をさせて戴き、審判の技術や心構えなど皆さんに色々と指導して戴きました。今振り返ってみると、ただ我武者羅に走り廻っていたこの頃がとても懐かしく思い出されます。

本格的に取り組むようになって1年が経った頃、今度は高等学校の県大会へお願いする事になり、2回戦あたりまで吹かせて戴けるようになりました。しかし、ルールの解釈はあやふやで判定の一貫性はなく、チームの方々には大変ご迷惑をおかけしました。当時は県協会の委員長を山田隆道先生（宇部養護）、高体連の委員長を兼田武典先生（早輿高）が務められていました。

そして、昭和58年春、周南地区から日本公認の候補として推薦していただく事になりました。しかし、経験の少ない私に不安を抱かれたのか、山田審判委員長がわざわざ徳山まで審査に来られました。ゲーム終了後に、7つの足（トラヴェリングの項）について質問を受け、答えられずに情けない思いをしました。その時、ルールの勉強を怠ってはいけないと痛感させられ、以後ルールブックを読む事を習慣づけるきっかけとなりました。

こんな事があって、日本公認にはまだ早いと諦めていましたが、これからを期待するとの意味を込めて青ワッペンがいただける事になりました。

公認審判となり、県高校総体や中国高校予選と前にも増して笛を吹く回数も増え、ゲームも準々決勝くらいまで機会を与えて戴くようになりました。しかし、最終日の枠に入るまでにはかなりの時を要しました。勿論、実業団や一般のゲームも務めていましたが、高等学校のゲームには何とも言い表せない緊張感や自分を高めるものがありました。その思いは今でも変わっていません。最終日を吹きたい、早く県内のトップレベルに近づきたい。色々な思いが交錯し、悩み焦った時期でもありました。この頃、色々な面で親身になって指導戴いたのが広田修造氏でした。以後、今日まで審判の枠を超えてお付き合いを戴いています。

そして、諦めずに顔を出すうちに、やっとな準決勝の割当に入る事が出来ました。その時の感激と緊張は今でも忘れられません。話は前後しますが、公認審判になって2年目頃であつたろうか、県協会の委員長が山田先生から小池先生へとバトンタッチされていました。小池先生はこの時すでに日本公認 A 級として日本リーグなどで活躍されており、我々にとって目標でもありました。

県内大会での実績が認められ、中国高校選手権や高校選抜中国予選（当時中国で2チームが全国大会へ出場）また、中国ミニ国体や中国実業団選手権など県外大会へも参加出来るようになりました。更に、昭和 61 年からは全日本実業団競技大会にも参加させて戴いています。

審判という未知の世界へ飛び込み、数年間手探り状態で行ってきた私にとって、この時期までは多少の悩みや苦しみがあつたとはいえ、どちらかと言えば順調であつたように思います。

中国大会も何度か経験するうち、昭和 61 年 11 月に、A 級審査会へのチャンスを戴きました。しかし、当時は A 級候補の技量にはほど遠く、年齢は 32 歳になっていましたが、初参加という新鮮さだけでの挑戦でした。その年の 4 月には、広田氏が A 級に昇格されていた事もあり、他に候補者がいなかったのが自分にとって幸運であつたかもしれなません。1 回目の挑戦では、その時の持てる力を十分に発揮することが出来、昇格は出来なかったものの貴重な経験となりました。2 回目の挑戦では、判定の一貫性とゲームコントロールに欠け失敗。3 回目もプレーの理解と笛の強さに欠けて、ことごとく失敗に終わりました。回を重ねる毎に自分の笛に欠けているものを真剣に見つける努力をしましたが、焦りと不安が常につきまとい、審判として一番苦しく辛い時期でもありました。

4 回目の挑戦では、もうこれが最後のチャンスと心に決め、白紙の状態で見ました。この年から、これまでのブロック審査に加え東京での最終審査が追加されました。しかし、もう後のない自分にとって、それをプレッシャーに感じることはありませんでした。

ブロック審査をパスし、平成元年 12 月いよいよ東京での最終審査「全国高校選抜大会」へと向かいました。この時、選抜初出場の三田尻女子高の小松先生にご無理をお願いし、新幹線でチームと御一緒させて戴いた事も良い思い出です。また、私のゲームをビデオに撮ってプレゼントして戴いた山口高校の河上コーチの心遣いが今でも忘れられません。

年も明けて、平成 2 年 2 月、小池審判長より昇格の報せを受けた時は、何とも言い表せない喜びと、これからの責任の重さをひしひしと感じました。そして、これまで自分を支え励まして戴いた多くの方々に対して、A 級としての自覚と責任を果たすことで恩返ししようと心に誓いました。この年から県協会の副委員長という大役も任され、一層身の引き

締まる思いでした。

以後、それまで以上に高体連との関わりも深まり、今日までお手伝いさせて戴いています。バスケットボールを通して多くの先生方と出合い、素晴らしいプレイヤーに出会うことが出来ました。会社勤めの私にとって大切な財産になっています。三田尻女子高校の選抜大会準優勝や山口高校の活躍に見られるように、山口県は全国レベルに達したといえます。審判員も高体連のゲームを通して、多くの経験をし成長して行くものと確信しています。

審判を始めて12年が経ち、やっと難しさや楽しさがわかってきたような気がします。今年で私も40才になりますが、現状に満足することなく次の目標に向かってチャレンジすると同時に、時代をになう審判員の育成に努力していきたいと思っています。

おわりに、山口県高校連バスケットボール部が益々発展しますよう、微力ではありますがお手伝いさせていただきますので、今後とも宜しく願いたします。

なお、本年4月4日早朝、日本公認審判員としてご活躍されていましたが、岩国市の青木一氏が交通事故で亡くられました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

山口県高体連バスケットボール専門部機関誌「南風」第10号（1994(H6)年4月発行）に掲載
登場人物の肩書き等は掲載当時のものです。
この文章の無断転載は固くお断りします。